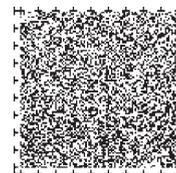


香港・成都における インクルーシブ防災セミナーに出席して

研究所 障害福祉研究部 北村 弥生



2016年9月8日から15日に、香港と中国西部の成都で香港リハビリテーション協会（以下、香港リハ）と中国赤十字共催のインクルーシブ防災セミナーおよび周辺地域の視察に参加しました。香港リハは国リハ同様、WHO協力センターとして中国本土でリハビリテーションの啓発を行っています。1969年設立の歴史を持ち、病院は併設されていませんが、民間であることを生かして、バンによる移動サービス（図1）、通所リハビリ、健康増進に加えて、高齢者を対象にしたサービスへの拡張を施設の新設に合わせて検討していました。その中で、障害者の災害対策に関心を持ち、WHO協力センターの広報誌Joyning Handsに防災に関する特集を取り上げ、北京リハビリテーションフォーラムで防災分科会を主催するとともに（平成27年、28年）、今回のセミナーを企画しました。「インクルーシブ防災」は、2015年国連世界防災会議を機に河村宏氏（元研究所障害福祉研究部長）が先導して障害者関連組織が提唱した「すべての人に配慮する防災」です。聴覚障害のセルフヘルプグループで独自に行っている火災に対する避難訓練についても、セミナーでは紹介されました。

香港リハは、四川大地震で障害を負った人へのリハビリテーション支援の必要が認識された時に、災害対策を専門とする香港および中国赤

十字協会と共に、被災地での地域リハビリテーションを進めました。地震により町ごと移転し、バリアフリー化した住宅で、地震以前から車椅子を使う必要がありながら寝たきりだった人が外出や家事をできるようになった例が紹介されました。また、地震により軽度の障害を負った女性を中心としたグループ活動の支援や地域を訪問して専門職者をスーパーバイズする人材育成を継続していました（図2）。

成都是三国志の蜀の都だった古都で、四川省の州都です。中心部から車で2時間程度の郊外には、四川大地震後に大きなリハビリテーション病院が設立されました（図3）。一方、成都市の中心部にある古い病院では、理学療法士資格を持つ医師は、省内のリハビリ医のネットワーク構築に取り組んでいました。両者共に、家族が泊まり込みで看護するのが当たり前、障害者の介護は家族がするのが当たり前という土壌の中で可能な支援を行っていました。

国土の広さ、国の体制、医療制度、災害の頻度など、日本と中国には違いも多くありますが、WHO協力センターとしての共同活動のひとつとして障害者のための災害準備に関する知見を集積し、地震・津波・台風が頻発する西太平洋諸国に貢献することに意義を感じました。



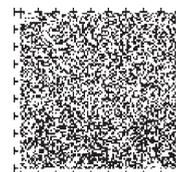
図1 香港リハ協会の移動サービス用のバン



図2 成都市郊外での地震体験者を対象としたグループワーク



図3 成都市郊外にできた四川大學華西醫院



第16回 国連障害統計に関する ワシントン・グループ会議に出席して

研究所 障害福祉研究部 北村 弥生

2016年12月6日から9日に、南アフリカの首都プレトリアで行われた第16回国連障害統計のワシントン・グループ会議（WG）に参加したので報告します。WGは国際比較を可能にする障害統計尺度を開発することを目的としています。この尺度は、医学的診断によらずに、ICF（国際生活機能分類）に基づいて生活上の機能制限をわかりやすい言葉で表現し、国勢調査または全国調査で「障害」を抽出するために使用することが想定されています。WHOは「障害に関する世界報告書」（2011）で、「全世界の人口の15%はなんらかの障害を抱えて生活している」としていますが、国際比較でいう「障害」は各国の障害福祉サービス受給者とは異なる概念です。

すでに、WGが2006年に発表した短い質問セット（6領域：視覚、聴覚、歩行、コミュニケーション、認知、セルフケア）は、これまでに78か国の国勢調査あるいは全国調査で使用されたことが報告されました。たとえば、「認知機

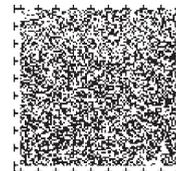
能」については、「記憶することや集中することに苦労がある」という質問に対して、「いいえ、苦労はありません」「はい、多少苦労します」「はい、とても苦労します」「全くできません」の4つの選択肢から、回答者は1つを選択し、6つの質問のうち「とても苦労する」または「全くできない」を一つ以上選択した場合を「障害」とすることが提案されています。

第16回WGでは、子どもに関する指標の確定が確認され（2～4歳用と5～17歳用）、環境指標として教育環境と労働環境が、それぞれUNICEF（国連国際連合児童基金）とILO（国際労働機関）の協力で作成されていることが報告されました。ワーキンググループの活動としては、精神領域の指標開発に加えアクセシビリティに関する指標開発は国連国際電気通信連合 International Telecommunication Unionと協力して引き続き行う方針であること、行政データの活用とデータ解析について新たに活動を開始することが承認されました。

表1 米国NHISの結果による障害レベルの区分案：上肢機能

		2リットルのボトルを腰から目の高さに持ち上げること				合計
		困難なし	少し困難	とても困難	できない	
小さな物をつまんだり、容器や瓶を開けたり閉めたりすること	困難なし	14786 困難レベル1	309 困難レベル2	58 困難レベル3	44 困難レベル4	15197
	少し困難	782 困難レベル2	355 困難レベル2	51 困難レベル3	40 困難レベル4	1228
	とても困難	98 困難レベル3	73 困難レベル3	51 困難レベル3	33 困難レベル4	255
	できない	9 困難レベル4	5 困難レベル4	7 困難レベル4	49 困難レベル4	70

困難レベルの数値が大きいほど困難が大きいことを示す。第14回、15回では、拡張質問群のすべての領域で困難レベルを決めようと試みたが、第16回では国際比較に必要な領域に限って提案された。



また、WGが開発した拡張質問セットを、米
国健康面接調査（NHIS：2013, 18歳以上サンプ
ル数16,750）で使用した結果の分析が引き続き
報告されました。拡張質問セットには、短い質
問セットの6領域に、「上肢」、「情動（「不安」
と「憂鬱）」、「痛み」、「疲労」に関する領域が
加わり、それぞれの領域に2～9の設問が含ま
れます。NHISのデータ解析の結果、拡張質問セ
ットのうち「上肢」「不安」「憂鬱」領域の6問
について操作的な困難レベルが考案されました。
短い質問セット6問の「かなり苦勞する」およ
び「全くできない」と上記の6問の困難レベ
ル4を合わせた操作的な「障害」を国際比較のた
めに使用することが提案されました。

会場となった南アフリカ統計局はプレトリア
中心部から5 kmにあり、広大な4階建2棟に
1100名の職員が働いているそうです。2000年に
初めて黒人が局長となり、局長室のある建物の
壁面には統計局の歴史が描かれていました（図
1）。また、市の中心である市庁舎の正面に位置
する自然誌博物館にあったアウストラロピテク
スの化石模型からは人類の起源に思いをはせ、
生活感のある哺乳類のはく製には野生を感じま
した（図2）。

※過去のWG会議の参加記録も、国リハニュースおよ
び国リハホームページに掲載されています。また、
WG会議でのプレゼン資料も国連WG会議のHPから
公開されています。



図1 南アフリカ統計局の建物内の壁に描かれた統計
局の歴史

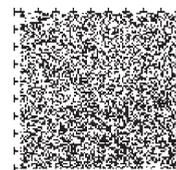


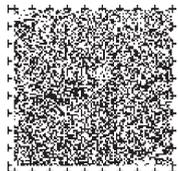
図2 動物のはく製
でも、ライオン
はヒョウを木の
上に追い詰めて
いた（プレトリ
ア自然誌博物
館）

【参考】ワシントングループの短い質問セットの質問

基本領域名	質問文
視覚	あなたはメガネを着用しても見るのに苦勞しますか？
聴覚	あなたは補聴器を使用しても聞くのに苦勞しますか？
歩行	あなたは歩いたり階段を登ったりするのに苦勞しますか？
認知	あなたは思い出したり集中したりするのに苦勞しますか？
セルフケア	あなたは身体を洗ったり衣類を着たりする（ようなセルフケア）で苦勞しますか？
コミュニケー ション	あなたは普通（日常的）の言語を使用して意思疎通すること（例 えば理解したり理解されたりすること）に苦勞しますか？

回答の選択肢
1 いいえ、苦勞はありません
2 はい、多少苦勞します
3 はい、とても苦勞します
4 全くできません





平成28年度研究所 一般公開（オープンハウス2016）開催の報告

研究所

「可能性を広げる支援 ～共に生きるために～」をキャッチフレーズに研究所の一般公開が10月22日（土）に開催されました。開催時間中は曇り模様ではありましたが、幸い雨に降られることもなく、無事幕を閉じることが出来ました。

本年度も昨年度に引き続き並木祭と同時開催となり、463名の方に足を運んでいただきました。ご記入いただいたアンケートからは幅広い年齢層の方にお越しいただいていることや、所沢市内からお越しいただいている方が多いことがわかり、研究所の一般公開も地域に定着してきたのではないかと思います。もちろん関東近県のみならず、遠くは北海道からお越しいただき、普段行っている研究の成果を多くの方々にアピールする良い機会になったのではないかと考えております。

本年度は、障害者ライフモデルルームをはじめとして、障害者モデル住宅、研究所第一、第二研究棟を展示会場として公開し、40を越えるテーマについて、それぞれパネルやデモ機、実物機器の展示を行い、中でも義肢に関する展示や発達障害に関する展示について、アンケートから多数の好評のご意見をいただきました。また今後の改善希望として、案内や広報、開催日時に関するものが多く「もっとPRをした方が良いのではないか?」「1日ではまわりきれないので2日開催でやってほしい」などのご意見を複数いただきました。



皆様からいただいた、貴重なご意見を今後の研究活動に反映させ、さらなる医療、福祉の向上を目指してまいります。多くの方々にご来場いただき、誠にありがとうございました。心から御礼申し上げます。

なお当日の展示内容の詳細および冊子の内容は以下のURLにてご覧いただくことが出来ます。

<http://www.rehab.go.jp/ri/event/2016openhouse.html>

